

平成30年6月2日現在

機関番号：64401

研究種目：基盤研究(A) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24242013

研究課題名(和文) アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト エジプト系伝承形成の謎を解く

研究課題名(英文) The Arabian Nights and Urban Middle-class Cultures in the Arab World: Revisiting the Formation of the So-called Egyptian Recension

研究代表者

西尾 哲夫(NISHIO, Tetsuo)

国立民族学博物館・グローバル現象研究部・教授

研究者番号：90221473

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 36,500,000円

研究成果の概要(和文)：アラビアンナイトは中世の中東で生まれ、世界文学となった。しかしながら、アラビアンナイトの成立過程についてはまだ解明されていないことが多い。本研究では、アラブ・イスラームの歴史におけるアラビアンナイトの文化的あるいは社会的価値に焦点をあてながら、とくに近現代における都市部中流層の台頭ならびに中間アラビア語の社会文化的な機能に着目し、いわゆるエジプト系伝承の形成過程に関する仮説を提案することができた。

研究成果の概要(英文)：The Arabian Night, which was born in the medieval Middle East, became a world literature. However, there remain many questions concerning the formative process of the Arabian Night. Focusing on the cultural and social values of the Arabian Nights in Arab-Islamic history, we have investigated the formative mechanism of the so called Egyptian recension of the Arabian Nights, with a particular emphasis on the rise of urban middle class and the socio-cultural function of Middle Arabic in the Modern and pre-Modern Arab worlds. We propose some hypotheses concerning the origins of the Arabian Nights.

研究分野：言語学、アラブ研究

キーワード：アラビアンナイト 千一夜物語 中東 イスラーム アラブ 写本 国際研究者交流 多国籍

### 1. 研究開始当初の背景

中世の中東で成立し、世界文学となったアラビアンナイト(千一夜物語)は、シリアの家庭で私家本として伝承されていた物語集(二百数十夜)に、近世エジプトにおける都市部中流層の台頭とともに中間アラビア語の誕生がきっかけとなって、当時知られていた民間の話(八百夜程度)が付加された結果、現在の形となったと思われる。

本研究では、新発見の写本も含めて従来は未研究だったエジプト系全写本の分析によって、その編集過程と言語的特性を明らかにするとともに、相反する価値観が併存してきた理由ならびに異文化交流による成立過程を解明する。また中間アラビア語の発生と伝播を通じて顕著にみられる、アラブ世界に特徴的な言語社会的位相を解明する。

### 2. 研究の目的

アラビアンナイト形成に関する新たな仮説として、エジプトではシリア系物語群を核とする複数の伝承が並行的に存在し「いくつものアラビアンナイト」が流布していたこと、エジプト系伝承形成には中流層の文字文化をめぐる社会変化が関係していること、複数伝承併存状況がガラン訳以降に終焉しヨーロッパ化された文学伝統の中で標準化が進行したことを提示し実証する。

### 3. 研究の方法

(1) 文学伝統の地域民衆化で形成されたエジプト系写本群の分類と系統の分析として、全エジプト系写本中の物語構成情報データベースの作成、新発見の非標準写本の校訂出版と系統の分析、非標準伝承になる物語の系統分析を実施する。

(2) 地域民衆の口語が文字化された中間アラビア語の歴史の実態と民衆文学変容の分析として、「カルカッタ第二版」の計量文献学的分析と民衆文化語彙索引の作成、国民共通語としての中間アラビア語使用実態の分析、国民共通文化形成における民衆文化の現代の変容の分析を実施する。

(3) アラビアンナイトをめぐるヨーロッパ的文学伝統の物語伝承への影響の比較分析として、マルドリユス遺贈コレクションの調査とマルドリユス版形成過程の分析とそのための調査、アラブ世界での再受容と文学伝統の関係の分析、日本での受容と文学伝統の関係の分析(杉田担当)を実施する。

### 4. 研究成果

(1) 都市部中流層文化としてのアラビアンナイト: アラビアンナイトは西暦9~10世紀ごろのバグダードで原型が成立したとされる。その後、多くの物語がつけ加えられていき、近世のカイロで現在のような形になったと思われる。9世紀に書かれた断片には冒頭部が記されているのみであり、まとまった形の写本としては14~15世紀ごろに

シリアで成立したものが最も古い。この時期にシリアでまとめられたものはシリア系写本と総称されており、二八夜前後の物語が収録されている。ガランが翻訳の底本としたのもシリア系の写本だった。一方、16~17世紀以降のエジプトでは、さまざまな伝承が文字テキスト化されるようになった。これらはエジプト系写本と総称されており、シリア系写本よりもはるかに多くの物語が収録されている。さらにエジプト系写本は、アラブ世界での最初の印刷本であるプーラーク版(1835年)とほぼ同じ内容を含み、その底本になったと推定される写本群と、他写本には含まれていない物語を多く含む非標準的な写本群に分かれる。前者のエジプト系写本は異本間の相違が比較的少なく、これらの一連の写本群の存在を特定したエルマン・ゾータンベールの名をとって「ゾータンベールのエジプト伝本(ZER)」と呼ばれている。ZER系写本の制作年代は18世紀末から19世紀初頭と比較的新しい時代に集中している。

アントワヌ・ガランによるシリア系写本の翻訳がきっかけとなり、アラビアンナイトがヨーロッパの読書界での地位を確立すると、ヨーロッパと中東の双方でアラビア語による印刷本が出版されるようになった。しかしながらこれらの印刷本は、アラブ世界で伝えられていた原典写本を底本としているわけではなく、ヨーロッパ世界の需要に応じた編集が加えられていた。さらにこれら印刷本の底本となったとされるアラビア語の諸写本にしても、オリエンタリズムに影響された中東観、ひいてはアラビアンナイト観にそって作成あるいは編集されたケースが多く、ヨーロッパの図書館に収蔵される過程で恣意的な選択がなされた可能性も指摘されている。特にガラン版の出版(1704年)後には、数多くのアラビア語写本が造られたのだが、その中には後年の研究によってねつ造であることが立証されたものもある。これとは逆に、オリエンタリズム的な前提に立つアラビアンナイト観にそぐわない諸写本については、十分な調査がなされてこなかった。つまり従来のアラビアンナイト研究は、ガランの翻訳に端を発する強力な思考枠の制限を受けてきたということができる。

従来の写本研究では、ガラン写本に基づく原型テキストの再構築と、標準正典版とされるカルカッタ第二版に基づく文学的分析が主な目的となっていた。上述のようなシリア系伝承とエジプト系伝承の関係、諸写本の作成時期、それらの諸写本と印刷本との関係についてはほとんど関心が払われてこなかった。したがってアラビアンナイトの諸写本について分析を試みるにあたっては、写本の成立時期や来歴、それぞれのテキスト分布や物語構成の相関関係を吟味し、ガラン写本に見られる特徴的な物語構成の影響についても再検証しなくてはならない。

次に、シリア系伝承の影響を受けながらも

独自に成立したと思われる近世以後のエジプト諸写本について、その成立事情を確認しておこう。エジプトではガラン版成立以前からシリア系とは異なる伝承を採録することで、千一夜を含む物語集を作ろうという動きがあった。ガラン版成立以後は、ヨーロッパからの影響下にこのような動きが加速され、特にエジプトでは大量のアラビアンナイト写本が作成されたと判断できる証拠がある。

現在、ヨーロッパの図書館に収蔵されているアラビアンナイト写本は、17世紀以降のものが大半を占める。これよりも先、写本の作成と利用は知的エリート層に限定されていたが、都市の成長にともなって富裕な市民の中には私的に写本を所有する人びとが増えていった。このような動きは、17～18世紀のシリアやレバノンのキリスト教徒社会、エジプトのコプト社会などで顕著にみられた。また、私蔵書籍がコミュニティーの貴重な財産として受け継がれていったこともわかってきた。ガラン写本にしても、特定の家族内で数世代にわたって大切に伝えられていたことが確認できている。このような動きと並行して17世紀以降には、オスマン帝国下のアラブ世界で地域文化が発展し、文学や言語の地域性が注目されるようになった。

都市中間層の中には書承文化に親しむ人びとが増えていき、文字テキストを作成する人びとも出てきた。こうして都市住民が書承文化に参入するようになると、中間アラビア語が誕生した。さらに17世紀ころからアラビア語世界共通の書きことばであったフスハーには微妙な変化が生じるようになった。アンミーヤの語彙や語法がフスハーに混入するようになるにしたがい、アンミーヤによる口承文化がフスハーによる書承文化に貫入するようになった。18世紀ころのエジプトで民間伝承を記したテキストが増加した背景には、このような事情があったと思われる。こうしてこの時代に集められた民間伝承がブーラク版の編集へとつながっていく。

(2) アラビアンナイト形成過程に関する仮説： アラビアンナイトのテキスト伝承の形成過程については、以下の仮説が提唱できる。

仮説1. エジプトで誕生した「いくつものアラビアンナイト」： エジプト系伝承にはガランと同時代の庶民が知っていた物語が採録されており、シリア系伝承とは別系統の物語から構成されている。シリアの家庭内で伝えられていた物語集は、エジプト系の伝承と合体することで新しい物語集として再生産され、いくつものアラビアンナイトが誕生した。ガラン版以降はヨーロッパの好みにあうような構成の写本に収斂していき、最終的に標準エジプト系物語集が誕生した。

仮説2. 文字化される民衆文化としてのアラビアンナイト： 17世紀以降のカイロでは、裕福な商人や職人らの中流層が書籍を所有するようになり、口頭で文化を伝承してきた人びとが、文字伝承による文化に参入して

きた。この時期には地方ごとの特色が顕著となっており、口語方言の影響を受けた「中間アラビア語」が誕生して民衆文化の文字化を促進した。このような社会変化が第二のアラビアンナイト誕生に影響した。

(3) 今後のアラビアンナイト研究への提言： ガラン写本の校訂を企画し、シリア系写本の綿密な分類をおこなったマクドナルドは、アラビアンナイトとはムスリムによる文学作品であり、他の法学書や歴史書からはいかがいしれない庶民の宗教実践や世界観を知るための第一級の資料であると考えた。その基本的態度は、最初の訳者アントワヌ・ガランからエドワード・W・レイン、そしてリチャード・バートン、さらには日本での前嶋信次にいたるまで一貫している。

しかしながら最近では、ガラン写本がシリアのキリスト教徒たちによって読み継がれていたことを確認したシロンヴァルの研究、キリスト教徒が作成したと思われる挿絵入り写本の発見、さらにはシンドバード航海記などの物語伝承においてキリスト教徒が果たした役割の再発見があり、従来のアラビアンナイト観は大きな修正を迫られている。ガラン版によって開始されたアラビアンナイトへのアプローチは、千一夜分の完全なアラビアンナイトを探求するものであったのと同様に、「イスラーム的」かつ「アラブ的」かつ「民衆的(フォークロア的)」なアラビアンナイトの再構築を目的としてテキスト伝承自体を学術的に囲いこんでいくものであった。正典とみなされてきたカルカッタ第二版やブーラク版だけではなく、これまでの研究では無視されてきた非標準的写本群(偽典や外典)をも対象とし、17世紀以降のアラブ世界における民衆文学と文字文化をめぐる社会的位相の中で、総体としての文明的現象としてアラビアンナイトの形成過程をとらえなおさなければならない。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計87件)

西尾 哲夫、中道 静香、岡本 尚子、  
鷲見 朗子、*The Arabian Nights and Urban Middle-class Cultures in the Arab World: Revisiting the Formation of the So-called Egyptian Recension*, *Minpaku Anthropology Newsletter*, 44号、査読無、2017、pp.5-9

青柳 悦子、*How Europeans encountered the Arabic world through the Arabian Nights*, *Proceedings of TJASSST2015 (Tunisia-Japan Symposium on Society, Science & Technology)*、査読無、2016、pp.1-5

西尾 哲夫、*梓物語異聞 もうひとつのアラビアンナイト*、ヴェッツシュタイン

写本試論、堀内正樹・西尾哲夫編『断と続の中東 非境界の世界を遊ぶ』、査読有、2015、pp.379-412

杉田 英明、動く島の秘密 巨魚伝説の東西伝播、山中由里子編『驚異の文化史 中東とヨーロッパを中心に』、査読有、2015、pp.237-255

中道 静香、Re-examination of Sources for the Second Calcutta Edition of the Thousand and One Nights、『アラブ・イスラム研究』、査読有、13、2015、pp.51-62

西尾 哲夫、The Takarazuka Revue and the Fantasy of "Arabia" in Japan、Marina Warner & Philip F. Kennedy eds. *Scheherazade's Children: Global Encounters with the Arabian Nights*、査読有、2013、pp.347-261

〔学会発表〕(計75件)

西尾 哲夫、Joseph-Charles Mardrus and Orientalism: Re-evaluating his Translation of the *Arabian Nights* in Light of New Findings from "Mardrus Collection Bequest"、国際シンポジウム French Orientalism and Its Afterlives in Japan and the Middle East、2018年

西尾 哲夫、岡本 尚子、L' Histoire de *Sindbad le Marin* est-elle de la littérature populaire?: Une nouvelle démarche entre tradition littéraire et culture populaire au Moyen Orient、国際シンポジウム La culture populaire au Moyen Orient: Approches franco-japonaises croisées、2017年

鷲見 朗子、『百一夜物語』の写本、日本中東学会第32回年次大会、2016年

〔図書〕(計20件)

西尾 哲夫、岡本 尚子、小田 淳一、Margaret Sironval、Marion Chesnais、La Librairie Abencerage、*Catalogue de Fonds Josephe-Charles Mardrus, traducteur des Mille et une Nuits*、2018(出版予定)

相島 葉月、I.B.Tauris、*Public Culture and Islam in Modern Egypt: Media, Intellectuals and Society*、2016、204

西尾 哲夫、臨川書店、『言葉から文化を読む アラビアンナイトの言語世界』、2015、212

〔その他〕

ホームページ等

<http://www.minpaku.ac.jp/research/actvity/project/other/kaken/24242013>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

西尾 哲夫 (NISHIO, Tetsuo)  
国立民族学博物館・グローバル現象研究部・教授  
研究者番号: 90221473

(2) 研究分担者

杉田 英明 (SUGITA, Hideaki)  
東京大学・大学院総合文化研究科・教授  
研究者番号: 90179143

小田 淳一 (ODA, Jun'ichi)  
東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授  
研究者番号: 10177230

青柳 悦子 (AOYAGI, Etsuko)  
筑波大学・人文社会系・教授  
研究者番号: 70195171

鷲見 朗子 (SUMI, Akiko)  
京都ノートルダム女子大学・人間文化学部・教授  
研究者番号: 20340466

永崎 研宣 (NAGASAKI, Kiyonori)  
一般財団法人人文情報学研究所・人文情報学研究部門・主席研究員  
研究者番号: 30343429

菅瀬 晶子 (SUGASE, Akiko)  
国立民族学博物館・超域フィールド科学研究部・准教授  
研究者番号: 00444141

相島 葉月 (AISHIMA, Hatsuki)  
国立民族学博物館・グローバル現象研究部・准教授  
研究者番号: 40622171

岡本 尚子 (OKAMOTO, Naoko)  
国立民族学博物館・グローバル現象研究部・外来研究員  
研究者番号: 90600817

(3) 研究協力者

中道 静香 (NAKAMICHI, Shizuka)  
国立民族学博物館・グローバル現象研究部・外来研究員  
研究者番号: 30372634  
(平成24年度まで研究分担者)